

## 第3回中間報告

(報告期間 2016年3月18日-2016年6月17日)

### 基本情報

派遣クラブ：広島東ロータリークラブ

カウンセラー：市川太一先生

受け入れホストクラブ：Rotary Club of Streatham

受け入れ先カウンセラー：Mrs. Chan Bisessar

国際ロータリー第2710地区2015-16年度グローバル補助金奨学生

大平勇也

報告書提出日：2016年6月17日

教育機関・専攻分野：キングス・カレッジ・ロンドン

中東学部紛争解決学科(修士課程)

MA Conflict Resolution in Divided Societies in the Middle East and Mediterranean Studies Programme at King's College London

## 1. 学業面での成果

3月上旬に授業をすべて終了して、現在は修理論文の作成に取り組んでいます。大学の図書館に通い関連する文献を調査し、獲得した知識を主題につなげて論じるという作業の繰り返しです。また、スーパーバイザーの先生の指導に従い論文の方向性を探る過程も、論文作成にあたり重要なプロセスです。

私の研究テーマはイスラエル―パレスチナ紛争に関する内容です。これはまで継続して同研究テーマに興味を持って学んできたことから、研究内容について、政治学や歴史学、紛争解決学などの分野から考察しているところです。

修士論文の成績は修士課程の評価の3分の1を占めることもあり、9月の提出締め切りまで、気を引き締めて論文作成に取り組んでいます。実際、これまでに提出した論文課題の中には仕上げるまでの時間が不足しうまくいかなかったこともありました。このような経験を通じて分かったことは論文を作成するには自分が想像している以上に時間と労力を要するという事です。そのような教訓を活かすべく、早めに論文を仕上げようと、危機感を持って学習に取り組んでいるところです。

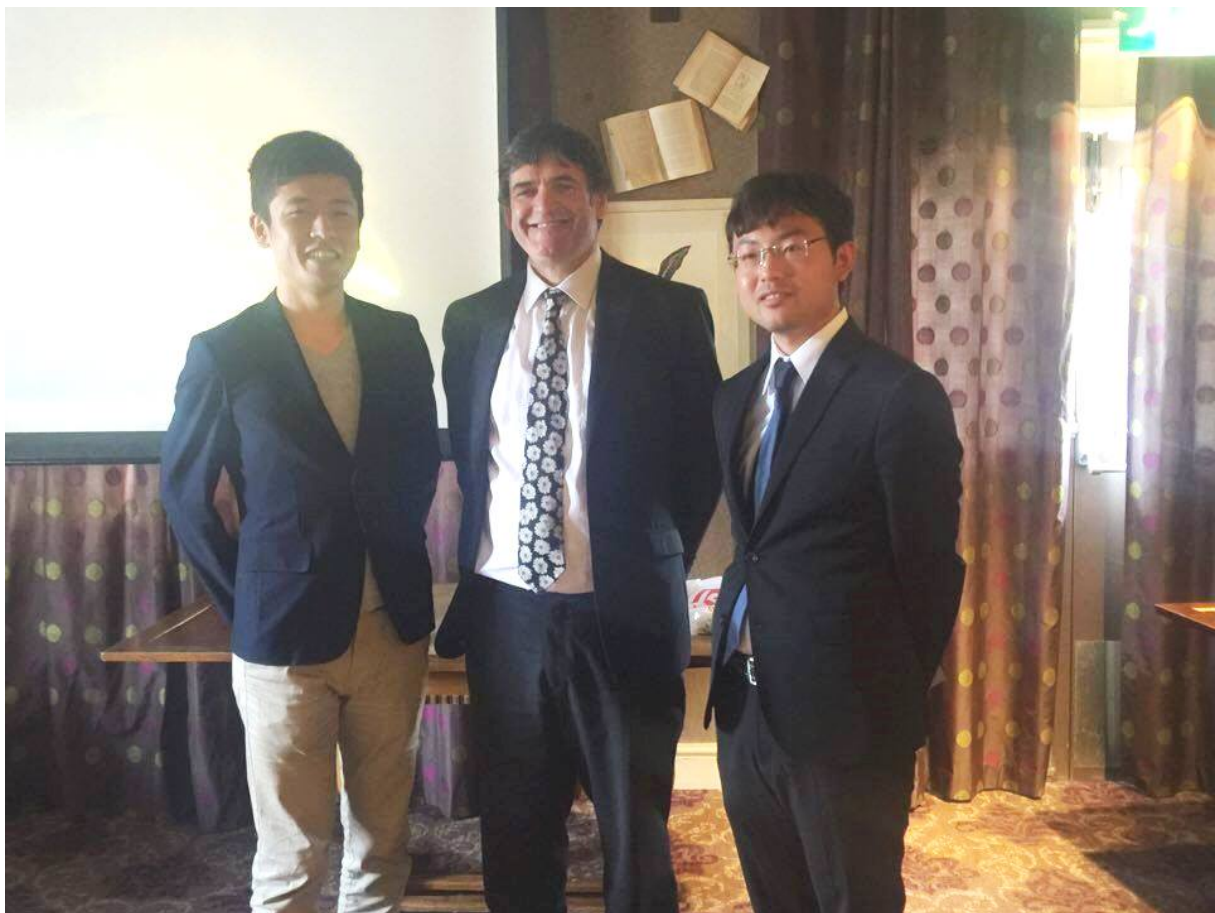


(写真) 大学メインキャンパスのStrand Campusとキャンパス内のチャペル

## 2. 受入地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流

オバマ大統領訪広直前の5月23日にRotary Club of Southgateの昼食会にてプレゼン発表をする機会をいただきました。プレゼン発表では修士課程で学んでいることにヒロシマに関するトピックを交えて自分の想いをお伝えしました。

ロータリアンの方には実際に平和公園を訪れたことがある方もおられ、その方のお話を伺っているとヒロシマの平和的象徴の意義について逆に教わったように思います。その方以外にも日本に観光したことがある方がいらっしゃり、そのようなロータリアンの方々に優しく迎え入れてくださったことには感謝に尽きません。



(写真) Rotary Club of Southgate クラブ代表の方  
と難民問題を専攻する友人と





(写真) Rotary Club of Dulwich and Peckham にて

また、3月22日にはRotary Club of Dulwich and Peckhamの夕食会に参加させていただく機会がありました。同クラブの夕食会でも日本について関心のある方からお話を伺うことができました。私の学業的関心に留まらず、このように日本やその文化に対して興味を寄せていただいたことは、日本人として誇らしいものでありました。結局ロンドンで

は四度プレゼン発表をする機会をいただきましたが、このような機会をいただく中で、国際舞台で活動したいという気持ちをより一層強くしました。

### 3. 今後のロータリー活動への参加

5月下旬に行われた地区ロータリー一奨学生farewell party（お別れ会）への参加が、実質ロータリーのイベントとしては最後の行事参加となりました。今後も参加が許される行事などがあれば、ロータリーのネットワークに参加していければと思います。



(写真) お世話になってきた地区ガバナー、Toni氏と

#### 4. 直面した課題、問題点等

友人の帰国：ロンドン大学ではほとんどの大学の第2セミスターを終了し、ロンドンで知り合った友人の中にはすでに帰国した生徒も多くなりました。フラットメイトで、9月から一緒に過ごすことが多かったMr. Bilalもそのうちの一人です。第2回のレポートでもお伝えした彼ですが、私のロンドンでの学びや日々の生活の充実は彼の存在なくしてはありえませんでした。

近くのレストランで一緒に朝食をとり図書館に通うなど、彼の「無理矢理」のモーニングコールに、実はすごく助けられてきました。同様に、普段から私の学業分野に関する話をする事が多く、そのことは学業課題に対して真剣味を持って考えることにつながっていました。実際、彼が帰国してしまってからというもの学業へのコミットメントは少々薄れてしまったように感じます。

Bilalは表面的でなく、揶揄いあいから深刻な悩みの相談まで何でも話すことのできる唯一の友人でした。帰国直前には些細なことでけんかをしていましたが、彼が空港へのタクシーに乗り込む際に3度ハグしお互い謝ったことで、これまでのことは何やらハッピーエンドと思えるに至りました。日本にいてもここまでの友人を持つことができればラッキーなことですし、彼との出会いは生涯忘れることのできない出来事でした。

Bilalが帰国して以降は、単純に図書館に通うだけでなく、学んでいる社会事象に関連したイベントに参加するなどして、学業テーマへの関心を保つよう心がけています。

#### 5. 今後の課題、目標

第一回中間報告でも記述しましたが、今回の留学は国際舞台で通用する人材になるための足がかりであると考えてきました。長期的に日系の

企業や機関で国際的に活躍するためにも海外で働く経験をしたいと考えています。

大学の授業期間終了後まもなくして在ロンドンの企業の就活イベントに参加することがありましたが、その中でグローバルに展開する企業が日本語力・英語力・ビジネスマナーに特化した人材を求めているという点を感じるようになりました。同時に、就職活動を通じて知り合いになった帰国子女の方や社会人経験者の方とお話する中でその能力の違いを痛感してきました。

学業に取り組むと同時に、ロンドンでお知り合いになることのできた日本人の方々との関わりあいを大切にして、国際舞台で働くことについて理解を深めていきたいと思っています。



(写真) 同じ大学に通う友人と。第2セミスター終了の打ち上げの様子。

## 6. 今後の奨学生への助言

### インターンシップや就職活動の開始時期

授業期間中は非常に忙しかったのですが、授業を終了した現在は時間的余裕に恵まれています。授業期間中にインターンシップをしたいなどと思うことは多くありましたが、状況を鑑みると授業日程終了からインターンなどの活動を始めた方が上手くいきやすいのではと、今振り返って感じています。

## 現地クラブでのプレゼンテーション

これまで合計で4回プレゼンテーションをする機会をいただきましたが、クラブを訪れることは非常に緊張するものでした。緊張を解決する策の一つとしてとして私がお勧めするのは会に友人を招待することです。

私は四度のプレゼンでそれぞれ友人を招待し、そのことは各々のクラブで歓迎されるものでありました。実際、一緒に会に参加してくれる友人の存在のおかげで自分自身次回のプレゼン機会に手を挙げようと考えるように至りました。

ロータリー活動自体が人と人が繋がる機会であると認識しておりますし、プレゼン発表に友人を招待することは良いことであったように思います。

## ロータリーイベント参加と学業の両立

1130地区では参加することのできるロータリーイベントに溢れていました。そのようなイベントに積極的に参加したという点では、少なくともこの先後悔が残らないようにすることができたと感じています。しかしながらイベントに参加する中で新たな機会への招待をいただき、それらに参加する中で授業期間中、少々疲弊していたのも事実です。

ロンドンでのロータリーのイベントに参加できることは人生でまたとない機会であると認識していますし、ロンドンで積極的にロータリーのネットワークに参加してきたことは生涯に渡り大きな財産となるものでした。他方で当然ながら修士課程で、授業準備（グループでの打ち合わせやプレゼン準備）に時間をかけて取り組むことも同様に貴重な体験でした。

私が今振り返って思うに、留学前の留学に対する明確なスタンスや位

置付けが多忙期の行事への参加や日々の生活の中での決断につながるのではと感じます。授業期間中の生活は多忙がために、次の行動の一つ一つが大きな意味を持つものです。それ故に次に何をするかという決断は自分の価値観が凝縮されたものであったように思います。そして、そのようなロンドンでの生活はとてつもなく恵まれているといえます。

私の場合、留学前は失うものは何もない状態でしたので、ロータリーやそれ以外のイベントには一種のハングリー精神から積極的に参加してきました。しかし他の留学生にとって、何に時間を費やすべきかという決断は常にその人の重視とするもの次第で異なると思います。

## 7. その他

5月におよそ一ヶ月間チェコ共和国の首都プラハを中心に東欧を旅行していました。以前オーストリアに旅行した際に感動し、それ以降いつか中欧—東欧地域を訪れたいと考えていました。

英国の EU 離脱に際して報道される社会現象としての「東欧」を離れ、実際に東欧を訪れて感じたのは人々の優しさや風情ある街並みでした。このような自由な都市空間を可能にしているのは、緊迫した世界情勢との距離感そのものであるかもしれません。



(写真上) 英国 EU 離脱決定を伝える Evening Standard 誌(6月24日付)



(写真=プラハ市内) 冷戦を経て平和の象徴と知られるようになったジョン・レノンの壁

